

百人一首 恋の歌よみくらべ

A

①

あしびきの  
山鳥の尾のしだり尾の  
ながながし夜を一人かも寝む

(柿本人麻呂)

山鳥の尾の長く垂れ下がった尾のように

(想い人にも会えない) 長い夜を一人寂しく寝るのだろうか。



山鳥

②

嘆きつつ  
ひとり寝る夜の明くる間は  
いかに久しきものとかは知る

(右大将道綱母)

(あなたが来ないので) 嘆きながら

一人で孤独に眠る夜が明けるまでの時間が、

どれほど長いものか、あなたはご存じですか。

いやご存じないでしょうね。

③

今来むと  
言ひしばかりに長月の  
有明の月を待ち出でつるかな

(素性法師)

「今すぐに参ります」と

あなたが言ったばかりに、九月の

夜長をひたすら寝ずに待っているうちに、

夜明けに出る有明の月が出てきてしまいました。



有明の月

④

やすらはで  
寝なましものをさ夜ふけて  
かたぶくまでの月を見しかな

(赤染衛門)

(あなたが来ないとわかっていたら) ぐずぐず起きていずに

寝てしまったのに。(あなたを待つうちに) 夜が更けて、

西に傾く月を見てしまいましたよ。

⑤

来ぬ人を  
まつほの浦の夕なぎに  
焼くや藻塩の身もこがれつつ

(権中納言定家)

いくら待っても来ない人を

待ち続け、松帆の浦の夕なぎのころに

焼く藻塩のように、私の身はその人を想って

恋焦がれているのです。